

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 12 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520212

研究課題名(和文) 雑誌『白樺』における文学の営為についての総合的な研究

研究課題名(英文) A Comprehensively Study of Literary Activity on "Shirakaba"

研究代表者

清水 康次 (SHIMIZU, Yasutsugu)

大阪大学・文学研究科・教授

研究者番号：70137173

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、文学・美術の両分野に跨る雑誌『白樺』(1910-1923年)を取り上げ、文学を孤立した営みとして研究するのではなく、当時の社会や諸文化・諸芸術との関わりにおいて捉えようとするものである。この研究期間を通じて、『白樺』同人たちの位置づけと彼等を取り巻く時代状況を明らかにすることができた。また、同人の代表といえる武者小路実篤の当時の考え方や活動を明らかにした。さらに、当時の文学と美術との関わりについては、『白樺』以前の状況を詳細に検討し、その非連続性と、それぞれの独自性を実証した。

研究成果の概要(英文)：This study covers the magazine "Shirakaba" (1910-1923) across both the fields of literature and art. It is intended not to study literature as an activity in isolation, but to capture the relationship between the society of that period and various cultures and various arts. Throughout this study period, I clarified the positioning of "Shirakaba", and the era circumstances surrounding coterie of it. Also, about Mushanokoji Saneatsu who is the representative of the coterie, I clarified his thinking and activities. In addition, as for the relationship between literature and art, I examined the previous several magazines in detail, and demonstrated that they are different each other, and they have own uniqueness.

研究分野：日本近代文学・書誌出版文化・比較文学

キーワード：『白樺』 文学と美術 武者小路実篤 西洋美術の受容

1. 研究開始当初の背景

(1)『白樺』(1910-1923年)についての研究は、一つのグループの活動として、また文学史上の一コマとして記述されたものが多い。それぞれの同人の活動についても、評伝的な研究か、文学作品(主に小説)を通しての研究がほとんどで、『白樺』という、文学と美術を共有する発信の場で、どのように文学の営みがなされてきたかを問うものはほとんどなかった。

(2)『白樺』は、文学と美術とを共有する雑誌であり、美術史の側からは、その美術への影響力や位置づけの研究がなされていたが、文学と美術の相互の関連を研究したものは少なく、せいぜいが『明星』『スバル』など当時の雑誌における文学と美術の関わりと共通するものと捉えられていた程度であり、それぞれの活動の独自性や意味は明確にされてはいなかった。

(3)『白樺』という雑誌を、発信のメディアとして捉え、当時の社会状況・文化状況を背後に置いたとき、それぞれの作品や評論がどのようなメッセージを帯びてくるのかという、時代との関連を深く意識した研究もあまりなされてこなかった。

以上のような現状において、研究を進めるためには、細部にわたる調査を総合していくような、「総体的な研究」が必要と考えた。

2. 研究の目的

(1)本研究は、文学・美術の両分野に跨る雑誌『白樺』を研究対象とし、単にそれぞれの同人が文学作品を発表する場として見るのではなく、それぞれの作品が同人たちの結びつきの中で生れ、雑誌というメディアから発信されたものであることに着目するものである。一つ一つの小説や評論や雑多な記事も、当時の社会状況や文化状況を背後に置いて見れば、見えなかったメッセージが現われて

来る。それらの同時代の状況の中で、『白樺』の活動を捉え直そうとするものである。

(2)個々の同人についても、掲載された作品に注目するだけではなく、同人相互の関係や、社会や文壇との関係、また他ジャンルの芸術との関わりなどにも着目して、その背後にあるものを明らかにしつつ、彼等の活動についての総体的な把握をめざすものである。

(3)『白樺』は、文学と美術を共存させた雑誌であるが、特にその西洋美術紹介は、印象派・後期印象派の美術を日本に紹介し、広く定着させたことに代表されるように、大きな文化的な貢献を達成している。同人たちは、なぜそのようなことを企てたのか、また、それはどのようにして達成されたのか。従来、時代の風潮のように言われていただけの文学と美術の共存について、広い視野から、また多種の視点から問題を追求して行こうとするものである。

3. 研究の方法

(1)『白樺』の記事の一つ一つについて詳細な調査を行い、各同人の動きについて、掲載された作品だけではなく、『白樺』刊行に関わる活動、同人相互の関係、他ジャンルの芸術との関わりやそこから受けた影響、また、文壇や社会に対する姿勢などを幅広く拾い集めた。特に、同人の代表といえる武者小路実篤と志賀直哉に着目した。

(2)『白樺』における文学と美術との関わりを知るために、まず、『白樺』に先行する芸術活動、すなわち『明星』(1900-1908年)、『スバル』(1909-1913年)、『方寸』(1907-1911年)などにおける文学と美術との関わりを調査し、『白樺』との共通性と相違性を確かめようとした。そのために、同時代の雑誌について詳細な調査を行った。

(3)『白樺』の持つ近代性と西洋美術の受容について考えるために、西洋においてはどのように文学と美術とが関わっていたのかを調査し、『白樺』の場合と比較検討した。

4. 研究成果

(1)明治30年代・40年代の文学と美術の共存する雑誌『明星』『スバル』『方寸』について調査し、『白樺』における美術との関わりと比較考察した。特に『明星』における美術との関わりは特筆すべきものがあり、編集者である与謝野寛の方針の下、西洋美術が紹介されていくが、これは同時代の日本の洋画界の動きと緊密に連携したものであったことが明らかになった。当時の洋画界を担う「白馬会」と「太平洋画会」という二大勢力に対して、『明星』は、コラボレーションと呼べる協力関係を形成する。それは、挿画として現われ、美術評論が掲載され、また開催された展覧会の合評会など、さまざまな形を取る。しかし、それは、日本における洋画界がまだ自立した動きや、専門的なメディアを持たない時期の共存(あるいは依存)であって、『明星』の終刊時期には、洋画界は自立した活動の場や独自のメディアを確立して行くことになる。したがって、『明星』における文学と美術の共存は短期間に終わるものであって、後続する雑誌が同様の活動を繰り返すとは考えられない。

『明星』から派生する『スバル』や『方寸』の動きも短期間のものであり、それぞれに時代状況に即した独自性を持つものであって、次に続く『白樺』の西洋美術紹介とは繋がらない。

そのように、従来、連続するものとして捉えられていた、明治30年代・40年代のこれらの雑誌の美術との関わりがそれぞれに時代状況や編者の意思に即して独自であり、非連続であることを実証した。

これらの成果は、後記する「『白樺』に先行する芸術運動『明星』『スバル』『方寸』と

その時代状況」(2013)という一篇にまとめられたが、論点の多さと多方面からの実証の必要から5万字を越える論文となった。

(2)『白樺』の同人たちの結びつきや、その中で文学と美術の共存については、ほぼ50年前の西洋の状況と類似することを、既に「文学環境の視点から見た『白樺』『白樺』の研究・序章」(『待兼山論叢』文化動態論篇、第44号、2010)で明らかにしていた。西洋から輸入されるのは作品だけではなく、同人とか仲間たちという、同志的でライバル的な相互関係や、雑誌やサロンという営みの形態も輸入されたのである。例えばパンの会や漱石の木曜会等、同人雑誌とサロンとを両輪の輪とするような当時の文学活動のありようについて、随時言及し、補強した。

(3)創刊期の『白樺』について、その方向性が定まるまでに大きな揺れがあったことは従来から指摘されていたが、特に中心的存在である武者小路実篤に着目して、創刊当時の彼の考え方や発想を追求し、後記する「武者小路実篤「それから」に就て」論(2014)にまとめた。創刊号の冒頭に、実篤がなぜ漱石の作品の批評を掲げたのか、また、それが正確な理解であったかを問うことから始めて、実篤の持っていた思想や発想の独自性を明らかにした。

具体的には、従来は、優れた「それから」評と位置づけられていた、実篤の「それから」に就て」を詳細に検討し直し、「自然」や「友情」の意味において、漱石との大きな隔たりを指摘した。また、それが、その後の『白樺』の特色ともなっていくことを示した。

(4)『白樺』における西洋美術紹介については、当初、創刊時期のものについてまずまとめようとして計画していた。しかし、調査を進めるに従って、とりわけ約4年間にわたる充実した

紹介の時期の全体を把握することが立論のためには不可欠であることが判明し、さらには、『白樺』第2巻第9号(1911(明治44)・9)から第3巻第2号(1912(明治45)・2)まで、山脇信徳・武者小路実篤と木下杢太郎との間で争われた「絵画の約束」論争についても、論争の意味を明らかにすることが必要であることが判った。そのために、この課題の調査と整理を終えるには当初の予定以上の時間を要することとなった。その調査を続けて、全体についての見通しはできたが、この期間内に成果をまとめきるには至らなかった。今後、できるだけ早い時期に、『白樺』の西洋美術紹介の全体像とその推移について、また、「絵画の約束」論争の意味について、論文にまとめるつもりである。

5．主な発表論文等
〔雑誌論文〕(計 2 件)

清水康次、武者小路実篤「「それから」に就て」論 実篤の問題意識と漱石作品との隔たり、国語国文、査読有、第83巻第11号、2014、1-16

清水康次、『白樺』に先行する芸術運動『明星』『スバル』『方寸』とその時代状況、大阪大学大学院文学研究科紀要、査読無、第53巻、2013、47-107

6．研究組織
研究代表者
清水 康次(SHIMIZU, Yasutsugu)
大阪大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：70137173